２０２５年3月２３日大斎節第３主日

イザヤ５５章１－９節
コリントの信徒への手紙一　１０章１－１３節
ルカによる福音書第１３章１～９節

新しい聖書日課になって、旧約聖書が出エジプト記からイザヤ書へ変わりました。『聖書』の小見出しは、「御言葉の力」となっていますが、この部分は、５５章５節に「**見よ、あなたが、知らない国民に声をかけるとあなたを知らない国民があなたのもとに走って来る。これは、あなたの神、主のためあなたに栄光を現した。イスラエルの聖なる方のためである**」とある通り、全ての人に対して与えられる、新しい恵についての呼びかけです。

５５節３節に「永遠の契約」という言葉があり、聖書日課を外れますが、それを受けて続く５６章には、新しい契約について記されています。歴史的背景としては、バビロン捕囚からのイスラエルの復興が趣旨ですが、新約にも通じる主なる神様との関係が記されているのです。ことに、「**私は彼らを私の聖なる山に導き私の祈りの家で喜ばせよう。彼らの焼き尽くすいけにえと会食のいけにえは、私の祭壇の上で受け入れられる。私の家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる**」（イザヤ 56 : 7）という部分は、イエス様がエルサレムに入城した際、神殿から商人達を追い出したときに引用した言葉です（マルコ 11 : 17 など）。イザヤ書５５章、５６章から示される主なる神様の意図は、人種の区別、身分などに関係なく主なる神様に連なり、主の僕として新しい契約の下にある者は、その恵に与ることです。イザヤ書の成立から約５００年の時を経たイエス様においてもそれは同じなのです。また、そのしるしとしての場所は、先週も学びましたエルサレムにほかなりません。

さて、本日の旧約日課の５５章１節に、「**さあ、渇いている者は皆、水のもとに来るがよい。金のない者も来るがよい。買って、食べよ。来て、金を払わず、代価も払わずにぶどう酒と乳を買え**」とあります。この箇所だけを抜き出しますと、社会に混乱を引き起こしてしまいそうな内容ですが、その理由は次の２節にあります。「**なぜ、あなたがたは、糧にもならないもののために金を支払い、腹を満たさないもののために労するのか。私によく聞き従い良いものを食べよ。そうすれば、あなたがたの魂は、豊かさを楽しむだろう**」ということです。これは、バビロン捕囚の場所にある食料について、その質が悪いとか、値段が異様に高いとか、経済的に不当に搾取されているとかいうようなことへの抗議ではありません。むしろ逆で、自分たちを滅ぼしたバビロニアの方が豊かであり、かつてイスラエルがエジプトにいた時と同じように、荒廃したカナンの地にある祖国を復興するよりも、バビロンで安定した生活をした方がよい、と考えてしまうことへの警告です。イザヤ書のこの部分がいつ頃書かれたかは不明ですが、バビロン捕囚は全体で約６０年、短い人でも約４０年続きましたので、バビロンの地での生活に慣れてしまった人はいたようです。

バビロンの地でも主なる神様を信じることはできる、今日ではそのように考えるかもしれません。しかし、律法から学ぶことよりも、神殿祭儀が信仰の重要な要素であった当時のイスラエルの人々にとって、異教の地で、また異教の神殿祭儀があ

る場所ではそうはいかなかったのでしょう。それゆえに、５５章３節に「**耳を傾け、私のところに来るがよい。聞け。そうすればあなたがたの魂は生きる。私はあなたがたと永遠の契約を結ぶ。ダビデに約束した、確かな慈しみだ**」とあるのです。約５００年前の祖先ダビデに約束された主なる神様の慈しみ、すなわち愛に満ちた契約関係に戻りなさいと告げるのです。しかも、その恵みは、イスラエルを超えてすべての人を招くものとして、新しくもされるからです。

ここにあるイザヤ書の言葉は、主なる神様に対する信仰を前提としますと、当然受け入れるべき言葉です。しかし、今、安定した生活を願うという人間的な観点に立ちますと、簡単には受け入れられない言葉です。そこに人間の思いと主なる神様の思いの違いがあります。そのような惑いを前提としてか、８、９節は、「**私の思いは、あなたがたの思いとは異なり、私の道は、あなたがたの道とは異なる――主の仰せ。天が地よりも高いように、私の道はあなたがたの道より高く、私の思いはあなたがたの思いより高い**」と続きます。『聖書』は、イスラエルが主なる神様から離れたから、バビロニア帝国による滅亡を招いたと考えますが、世界史的見れば、バビロニア帝国が圧倒的に強かったからです。その強い力のもとにあることは、たとえ征服された側であっても、安定している状態といえなくもありません。しかし、そこにはすべての人にさいわいとなるような恵みはありません。すべての人にさいわいとなるような恵みは、主なる神様が与える、そのことを示すのがイスラエルの使命です。その使命を考えれば、バビロン捕囚の終了とともに、イスラエルの主なる神様の王国・支配の復興に努めることは大切な事柄にほかならないのです。

さて、このイザヤ書と関連させてイエス様の受難について考えます。そして、そのように考えるには大切な事柄があります。それは、わたしたちは、イエス様の十字架の前で何を見て、何を告白するのかということです。その答えは教理的に、神学的に、歴史的に、あるいは哲学、心理学的にいろいろあるといえますが、わたしは、その答えが、主なる神様が創造された姿であり続ける人間の姿であると思います。人間的思いからすれば、受難の時に、憎しみ、怒り、悲しみ、それらを示すことが当然と思います。「**わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか**」（マルコ 15：34）と語られたイエス様の姿に、そのような面が全くなかったとは言えません。しかし、最後まで自分を殺そうとする人々をも受け入れようとする十字架の姿には、最後まで人間でなくなることを選ばなかったイエス様がおられるのです。イエス様のように主なる神様が与えた人間性を失わないことが大切、これも簡単にはできないことですが、当然のことです。それゆえに、その当然のことを改めてわたしたちは、この大斎の時に学びたいと思います。

本日の使徒書でパウロは、「**あなたがたを襲った試練で、世の常でないものはありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます**」（１コリ 10：13）と語ります。これは一般論的格言のような言葉ではなく、パウロの実感のこもった言葉といえます。世界は今も試練に満ちています。バビロン捕囚という世界史的な試練においても、主なる神様はもっともよい道を示されました。そして、イエス様の試練、受難の姿に、まことの希望があります。それを本日も心に刻みたいと思います。